編集委員が行く

学校から地域へ、そして社会人へ

北海道小樽高等支援学校、ライフサポート北広島、株式会社北海千日（北海道）

あきる野市障がい者就労・生活支援センターあすく　センター長　原 智彦

取材先データ

北海道小樽高等支援学校
〒047-0261　北海道小樽市銭函（ぜにばこ）1-10-1
TEL 0134-61-3400　FAX 0134-61-3430

医療法人やわらぎ
ライフサポート北広島
〒061-1113　北海道北広島市共栄（きょうえい）町4-11-1
TEL 011-372-7055　FAX 011-375-9975

株式会社北海千日（ほっかいせんにち）
〒047-0261　北海道小樽市銭函3-524-12
TEL 0134-62-4170　FAX 0134-62-4835

編集委員から

今回の取材をお願いし、関係機関と具体的な相談を始めたのは８月初旬でした。９月６日午前３時の北海道胆振（いぶり）東部地震は、震度７という道内では初めて観測された大地震。まもなく大規模停電となるブラックアウトの影響で、取材先の学校や企業も大きな被害を受けました。そのようなたいへんな状況のなか、快く取材を受けていただき、記事にすることができました。被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。また取材先のみなさまのご協力に心より感謝申し上げます。

Keyword：特別支援学校、就業体験、現場実習、学校見学会

写真：小山博孝

北海道小樽高等支援学校

POINT

① 地域と連携した学習内容の改善と就労支援
② 雇用企業および事業所と学校とのつながり、相互理解の機会
③ 地域の社会資源としての学校、次世代育成の場としての学校

地域を呼び込む、地域に出かける

北海道小樽高等支援学校は、2009（平成21）年4月に、高等部職業学科として開校し、今年で10周年を迎える。開校当初は「旧北海道立肢体不自由者訓練センター」に仮校舎としてスタートするが、2年後の2011年4月には、かつてニシン漁が盛んであった小樽市銭函（ぜにばこ）の地に新校舎ができた。海に面した緩やかな丘陵に建つ校舎は明るく、生徒が毎日清掃をしていることもあり、7年経ってもきれいな校舎を維持している。この新校舎開校の前年2010年4月には、職業学科5科7クラスとなり、1学年56人の規模になった。①「生活技術科・生産技術科」では、主に紙やガラスなどの素材を使った製品の製造、②「木工科」では、木材などを主材料とする製品の製造、③「環境・流通サポート科」では、清掃・校内外の環境整備、冊子の製本作業など、④「生活家庭科・家庭総合科」では、被服・織物・手芸などの縫製作業、パン・焼き菓子などの製菓作業、⑤「福祉サービス科」では、介護・接客・調理などの作業を学んでいる。また、「福祉サービス科」では2年次後期から3年次にかけて「介護職員初任者研修」の資格取得を目ざしている。

校長の松浦孝寿さん

学校の特色として、まずあげられるのは「Cafeポッポリー」の設置である。ここ10年ほどで、学校内にカフェや喫茶を取り入れる取組みが見られるようになってきたが、小樽高等支援学校では、新校舎の設計段階から校内のカフェを構想し、生徒・職員とは別に地域住民のための出入口を設けている。「ポッポリー」とは、生徒が考えた学校のマスコットキャラクター（20頁写真参照）であり、小樽に生息しているアオバトをモチーフにつくられた。

店内に入ると、「福祉サービス科」の生徒が笑顔で迎える。カフェの利用についての説明をし、ていねいに席へ案内してくれた。20席あまりのテーブルは広くゆったりとしており、飲み物などを提供するカウンターも機能的につくられている。壁には生徒の学習の様子を紹介する掲示が工夫されており、お店の雰囲気もなごやかである。

営業日は火・水・木曜日の週3日、午前10時から12時10分まで。店舗経営のコンセプトは、各科が協力して全校で運営をすることである。メニューボードの作成（木工科）、窓を含めた清掃（環境・流通サポート科）、パン製造と販売（生活家庭科・家庭総合科）、ランチョンマットやカフェグラスの作成（生活技術科・生産技術科）など、各科が協力してカフェの運営をしている。地域住民にカフェを利用してもらうことで、接客する生徒のコミュニケーション能力や、実践的な働く力を向上させる場として機能している。午前11

「cafeポッポリー」。
福祉サービス科の生徒が笑顔で迎える

地域施設も「環境・流通サポート科」の実習場となっている

大人気のパン販売

時20分からはパン販売を行い、リピーターが増えているそうである。パン販売は人気があるため、整理券を配布し、その日の販売個数内で希望者全員が購入できるよう、お客さまに協力してもらっている。

飲み物を提供してくれた1年生の生徒に、ここで働くことの意義を聞くと、「お客さまに喜んでもらえるから」という返事が返ってきた。名札には自分の学習目標が書かれており、顧客意識とともに、それぞれの役割により自分が人の役に立っていることを実感できる仕組みをつくり出している。

小樽高等支援学校では、地域に出て、働く意義や態度・技能を学ぶ機会を大切にしている。例えば「環境・流通サポート科」は、地域施設の定期清掃を行っている。玄関や廊下・窓などの清掃をしており、私たちが訪れたときは、玄関の清掃と窓拭きを行っているところであった。2階と3階の高所の窓を、校内で練習してきたロングポール（長い柄のモップ）を使用し、2人一組で外側から安全に拭き掃除を行う。一方、建物のなかにいる生徒は、外側の窓の拭き残しを確認しながら、内側の窓を拭いており、3人が協同して作業を行っている。

「現場実習全体報告会」と「学科別交流会」。
報告する側も、聞く側も、みな真剣だ

ビルクリーニング検定（※）などによる清掃の品質を大切にしながら、地域に貢献する学びの機会を増やす取組みは、近年各地で見られるようになってきた。学校内の清掃にとどまらず、地域の公的な建物や施設などの清掃に取り組む学校が増えてきている。私たちが訪れたのは10月の上旬であり、小樽では紅葉が始まるころであった。担当の先生からは、「冬になると町内の雪かきも、学習として行っている」とうかがった。特に、ひとり暮らしの高齢者には、こうした雪かきが、生活を送るうえで欠かせないとのことだ。

「生活家庭科・家庭総合科」は、学校近くの会社に出かけて、お昼のパン販売も行っている。また、「福祉サービス科」は、カフェの営業日などのお知らせを、近隣の住宅などにポスティングしている。知的障害特別支援学校における職業教育では、かねてより企業などにおける就業体験が大事にされてきた。実際の就業現場での学習は、知識および技能に加え、必要とされる作業態度を実践的に学べるからである。しかし、こうした就業体験は受入れ先の理解・協力が必要であり、年間に平均数回しか実施できない。そのため、日常の学習内容を充実させる工夫が必要となる。地域に出かけ、地域を呼びこむ工夫は、日常の学習内容を豊かにし、学びの質を高める効果が期待できる。

「福祉サービス科」のカフェ担当の先生は、運営にあたってのポイントとして「担当する教員の立ち位置や、物品の置き場所を含めた店舗運営のマニュアルが重要です」と話してくれた。担当する先生が、どの生徒も同じ環境で学べるように配慮することが、学習の質を担保することになるからである。店舗運営は、生徒も先生も同じスタッフとして、地域のお客さまに喜んでもらえるお店にすることが必要になるため、当然、お客さまの前では直接的な指導を控えることになる。このような経験が、企業での就業体験へたしかにつながる学習となる。

※ビルクリーニング検定：掃除能力を測定する小樽高等支援学校独自の取組み

企業向け学校見学会で説明にあたる進路指導主事の三浦範久さん

「ライフサポート北広島」で活躍する木村紘哉さん（右）と、作業を見守る施設長の宮崎夏代さん（左）

就業体験の学びを深める

各学年では、地域の企業などの協力を得て、就業体験（現場実習）を実施している。1・2年生は体験後にそれぞれの学年で「実習報告会」を行い、学習の振返りをして終える。一方3年生は、全学年対象に「現場実習全体報告会」と「学科別交流会」で発表し、自己の体験の振返りを後輩へと伝える学びの場を設定している。

今年度の3年生の就業体験（現場実習）は、9月3日（月）から始まったが、台風21号の北海道への上陸、続く北海道胆振東部地震などの災害のため、自宅待機を含めたいままでにない対応を迫られた。しかし、生徒自身の努力と、企業および家庭や学校の協力のもと、実習2週目から再開できた。進路指導主事の三浦範久（みうらのりひさ）さんによると、「突然の災害への対応となり、応用編の就業体験となった。生徒たちもよく頑張った」と振り返った。

「現場実習全体報告会」では、3年生が学んできたことの成果と課題を発表し、続いて各科に分かれての「学科別交流会」が行われた。ここでは、3年生の振返りと1・2年生からの質疑応答が業態ごとのグループに分かれて2回行われた。先輩の発表を聞く後輩の姿は真剣で、自身の近い将来に向けての具体的な疑問や質問が続々と出てくる。下級生のこのような意欲的な姿勢は、3年生が校内におけるメンター（指導者）のような存在であるからかもしれない。どのグループも終了時間まで質問が途切れないことが印象的であった。

「福祉サービス科」では、3年生から「報告・連絡・相談が大事であり、1・2年生のうちに学んでおくと困らない」、「実習中でも職員の一人として行動すること」、「笑顔と元気な挨拶をしたほうがよい」、「お客さまと話すとき気をつけることは、笑顔・言葉遣い。笑顔になると相手も笑顔になる」などの具体的なアドバイスがあった。この学習で、就業体験と日常の授業がつながり、何を学び、何ができるようになることが必要なのか、生徒同士でわかりやすく学び合える機会となっていた。

雇用先を訪ねて「ライフサポート北広島」

医療法人やわらぎ「ライフサポート北広島」は、札幌市から南東に車で30分ほどの北広島市にある高齢者のデイサービス（25人定員）と、グループホーム（各階9人、共用型デイサービス3人）を運営する施設である。開設は2010年。施設長の宮崎夏代（みやざきなつよ）さんに、今回の災害についてうかがうと、地震の震源地に近いこともあり、まだ暗い午前3時の大きな地震は、利用者に不安を与えたようである。ただ、緊急時の対応について日ごろから訓練していたため、大きな混乱にはならなかった。しかし、まもなく起こった停電は、オール電化の施設にとっては致命的であった。

非常灯は約1時間で消えたため、トイレに懐中電灯を置いて対応をした。明るくなってから食事の準備をしようとしたが、IHのため使えない。災害時に用意していたカセットコンロを利用するためにはガスボンベの補充など職員の協力が必要であった。また、食材などの買出しも、停電が回復した地域まで出向くことが必要であった。

「大きな災害でしたが、停電を経験したことで災害時の対応を見直すことができ、何より職員の協力が大きな支えになりました」と話してくれた。

小樽高等支援学校から採用した職員は2人。入社1年目と2年目の職員がグループホームで働いている。地震当日と翌日は公休とし、通勤などの安全が確保できてから勤務を開始した。仕事内容は清掃（感染症予防の消毒を含む）、洗濯物の取込みとたたみ、お茶の準備提供、利用者の血圧や体温の測定、昼食および夕食の準備など日々の業務を固定している。

木村さんの後輩で、
今年の４月から働いている佐藤祐治さん。
パラバスケット選手としても活躍している

「新しい内容もくり返し教えながら、本人のできるところを活かして身につけてきています。学校で学んでいる介護職員初任者研修の知識や理解は大切ですが、実際の介護経験のなかで、一人ひとりに合わせた支援が必要とされることを学ぶことが大切です」と宮崎さんは話す。

その意味で、現場での就業体験は生徒にとって大事な学びとなっている。1階を担当する佐藤祐治さん（18歳）はスポーツが得意で、「全国障害者スポーツ大会」バスケットボール競技の札幌代表であり、体格がよいため、入浴介助などの身体介護も行っている。各部屋には人感センサーを設置してあるので、センサーが鳴ったら部屋に駆けつけ、トイレの誘導なども行っている。

2階を担当する木村紘哉さん（19歳）は、話好きで利用者の人気者である。利用者から見れば孫のような年齢の彼が、さまざまな会話をしてくれることで、よい効果を生む。

株式会社北海千日の社長、山本金志郎さん

「認知症の人は忘れることが多くなりますが、感情は最後まで残るといわれています。そのため、自分にとって職員がよい人と思えるような関係づくりが大切になります」と施設長の宮崎さんは話す。

採用した2人とも、利用者と同じ目線で話し、素直で裏表のない人柄のため利用者から好かれており、たとえ注意されても気持ちを切り替えながら休まず勤務している。

取材の終わりに「いろはかるた」を職員と楽しむ利用者さんを見守りながら、お茶の準備をする佐藤さんに聞いてみた。

「たいへんなことは、移動介助や食事介助、楽しみは、今週末の福井県での全国障害者スポーツ大会参加です。うれしいことは、仕事が終わって『ありがとう』といわれることです」

就職してからも、日々学びながら力を伸ばしている2人の姿はさわやかであった。

雇用先を訪ねて「株式会社北海千日」

「セコマグループ」は、北海道を中心に「セイコーマート」をはじめとするコンビニエンスストア1100店舗以上の店を経営し、グループ企業全体で安全で良質な食品などの製造から物流までを管理し提供している。今回の災害時には、自治体にいち早く物資の供給を行い、停電時にも店舗を開いて道民の生活を支えたことはニュースでも話題となった。そのグループ企業のひとつである「株式会社北海千日」で働く小樽高等支援学校の卒業生2人を取材した。

まず、社長の山本金志郎さんにお話をうかがった。

「北海千日では、グループ企業のなかで豆腐と卵焼きなどの食品製造をになっており、毎日8千個から1万個ほどの商品を提供しています。今回の災害では、小樽地域の電力がほぼ1日で回復したため、翌日からは操業を開始できました」

この4月から働いている角田柊也さん（18歳）と、畠山一仁さん（19歳）の職場の様子も見せていただいた。

角田さんは、できあがった商品（油揚げ）にラベルを貼る作業を社員と2人で行っており、手際のよい作業ぶりであった。一緒に働く社員の方は「入社直後に比べ格段に仕事が速くなった」とほめていた。角田さんも「作業のスピードが速くなりうれしい」と話している。

畠山さんは、専用の機械で商品（油揚げ）が入っているなべに調味液を注入する作業を行っている。全体で7～8人ほどで

商品のラベル貼り作業をする角田柊也さん

いなり寿司用調味液を注入する畠山一仁さん

企業向け学校見学会

行う生産工程ラインの一部を任されている。

「機械などの操作に関心が高く、新しいことを覚えようとする意欲がある」と取締役部長で工場長の柴田敦也さんは話す。

「2人とも、当社での就業体験をくり返しながら適性がわかり、能力も向上したので、よいマッチングができた」と山本社長。

北海千日では、2工場の従業員78人のうち8人が障害者手帳を所持している。しかし、「障害者との差異を設けるのではなく、本人の能力を充分に発揮してもらう環境を整えることが大事である」とも話していた。

北海道では毎年2万5千人ずつ人口減少が続いており、今後労働人口の減少が深刻な課題となるそうである。地域を活性化し、働く担い手を広げていくことも企業の社会貢献、地域貢献であると感じた。

雇用先・体験先とつながる ～経済部と教育庁の事業～

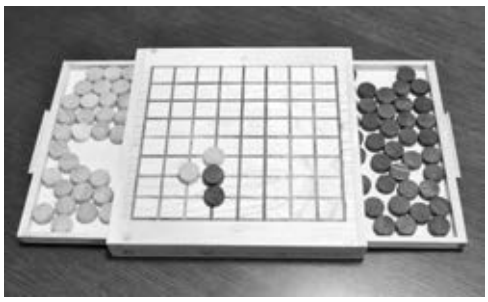
取材2日目の10月10日(水)に小樽高等支援学校を会場として、企業12社20人を対象とした「企業向け学校見学会」が開催された。北海道経済部労働政策局雇用労政課が主催する「障がい者雇用スタートアップモデル事業」の一環としての学校見学会であり、教育庁学校教育局特別支援教育課が連携協力している。雇用労政課就業支援グループ主幹の高橋大輔さん、特別支援教育課学校教育指導グループ主任指導主事の三瓶聡さんの話によると、学校見学会は昨年度は2校のみであったが、今年度は7校で実施予定であるとのこと。こうした企業と教育現場との出会いの場は、今後の就業体験や雇用へとつながる貴重な機会となる。関係部署が連携協力することで、学校および生徒の社会参加の機会を拡大する動きが高まることを期待したい。

学校見学会では、学校の概要と障害者雇用の制度についての説明の後、生徒が企業担当者を案内し、授業見学会へと移った。授業ではロングポールを操作しながら窓拭きをする生徒の姿や、坂道で車いす介助をする生徒の姿、機械操作をしながら木工製品や食品製造をする生徒の姿が見学できた。

2015年度から、木工科では「東京おもちゃ美術館」の協力を得て囲碁の木工製品をつくり、ミャンマーの子どもたちとの囲碁による交流が行われている。木工科を担当していた教頭の徳永光さんは、それらの成果をまとめ、ユネスコスクール（持続可能な開発のための教育）の認定を受けることになった。

校長の松浦孝寿さんは、「開校以来、地域に出て地域から学び、授業の内容と質を高めてきた。10周年を迎え、小樽高等支援学校の学びがローカルからグローバルへと広がることを願っている」と話す。

新たな職域や卒業生の定着に向けて、さらなる授業改善とその充実に期待したい。



生徒が製作した囲碁セットと、その製品で遊ぶミャンマーの子どもたち（写真下：小樽高等支援学校提供）